

「万葉集を読む」桐生地域の歌を含めて

群馬県立女子大学 北川 和秀

平成二十三年六月十日
桐生市立中央公民館

◎万葉集卷二十・防人歌

①天平勝宝七歳乙未二月、相替りて筑紫に遣はさるる諸国の防人等の歌

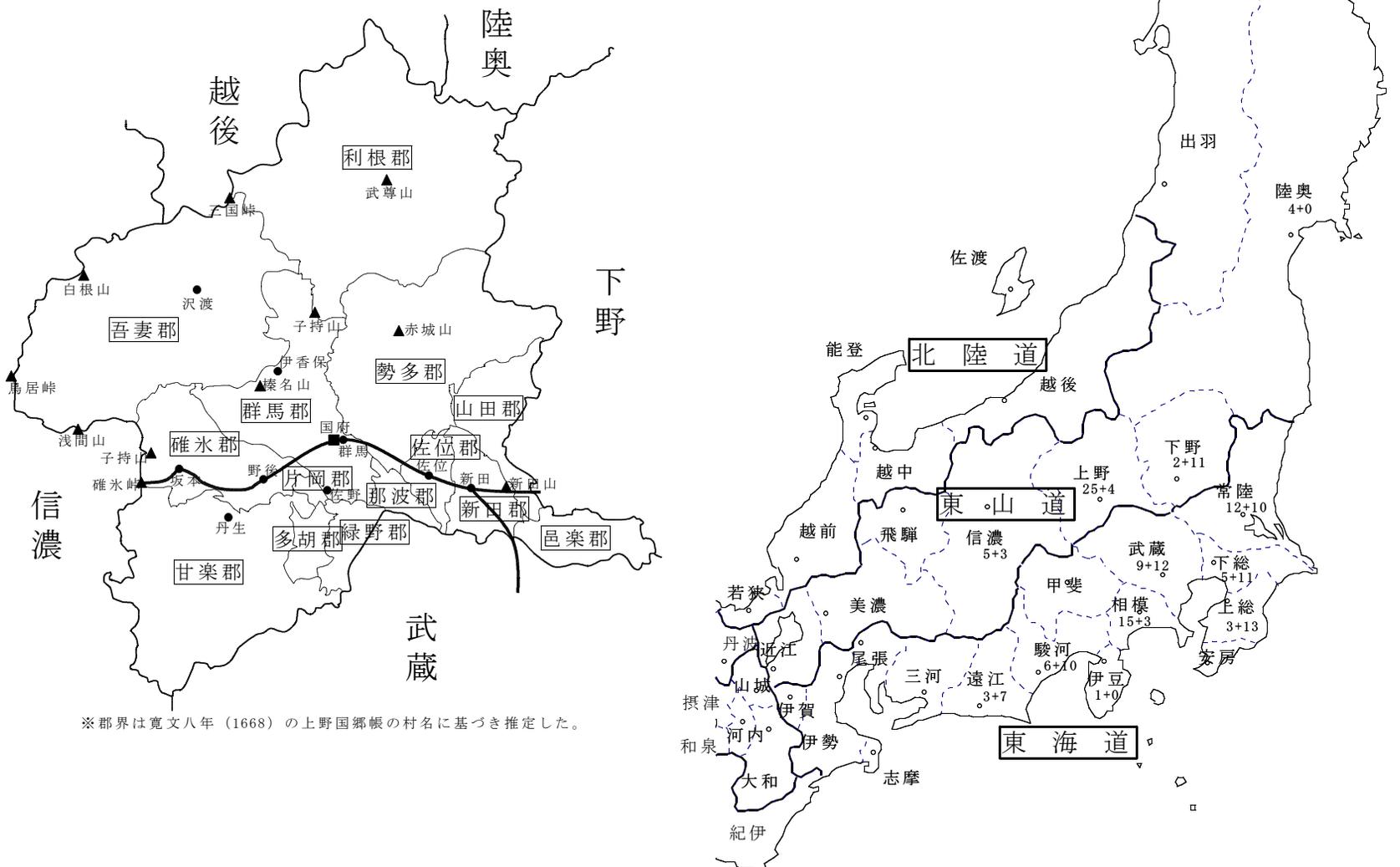
遠江国	7首	18首
相模国	3首	8首
駿河国	10首	20首
上総国	13首	19首
常陸国	10首	17首
下野国	11首	18首
下総国	11首	22首
信濃国	3首	12首
上野国	4首	12首
武蔵国	12首	20首
		84首 / 166首

②昔年防人 … 8首
合計 92首

◎万葉集卷十四（東歌）の配列

国名判明	雑歌 5	上総 1首 下総 1首 常陸 2首 信濃 1首	東海道 — 東山道
	相聞歌 76	遠江 2首 駿河 5首 伊豆 1首 相模 12首 武蔵 9首 上総 2首 下総 4首 常陸 10首 信濃 4首 上野 22首 下野 2首 陸奥 3首	東海道 東山道
	譬喩歌 90	遠江 1首 駿河 1首 相模 3首 上野 3首 陸奥 1首	東海道 東山道
国名不明 140	雑歌 相聞歌 防人歌 譬喩歌 挽歌	17首 112首 5首 5首 1首	
		合計 230首	

東国地図
(国名の下に数字は東歌+防人歌の数)



※郡界は寛文八年（1668）の上野国郷帳の村名に基づき推定した。

上野国の赤城山の葛葉のカズラが枝分かれしながらそれぞれ延びてゆくように、
 愛しいあの娘と別れ、ますます遠く離れて、ここまで来てしまったことだなあ。



3404

上野野安蘇の真麻群かき抱き寝れど飽かぬを何どか吾がせむ

上野国の安蘇の麻の束を抱きかかえるように、あなたを抱き締めて寝ても、それでもなお満足できない気持ちをいったい私はどうしたらいいのでしょうか。

*参考「下野野安蘇の河原よ石踏まず空ゆと来ぬよ汝が心告れ」(3425番)

3434

上野野阿蘇山葛野を広み延びにしものをあぜか絶えせむ

上野国の阿蘇山の蔓草は、野が広いのを幸いに遠くまで這い延びてゆきます。こんなに這い延びたものがどうして途中で絶えたりしまししょうか。

3421

伊香保嶺に雷な鳴りそね吾が上には故はなけども子らによりてそ

伊香保の峰に雷よ鳴ってくれますな。私にとっては別にどうということはないのですが、あの娘が怖がるものでね。

3422

伊香保風吹く日吹かぬ日ありと言へど吾が恋のみし時なかりけり

伊香保風は、吹く日も吹かない日もあると言いますけれども、私があなただを思う恋心ばかりは、止むときがありません。

3423

上野野伊香保の嶺ろに降る雪の行き過ぎかてぬ妹が家のあたり

上野国の伊香保の峰に降る「雪」ではありませんが、たやすく「行き」過ぎることができない、あなたの家のあたりよ。

*参考「我がやどの君松の木に降る雪の行きには行かじ待にし待たむ」(1041番)

吾が恋は現在もかなし草枕多胡の入野の将来もかなしも
私の恋は今も切ない。そして（多胡の入野の奥ではないが）将来も切ないこと
す。

利根川の川瀬も知らず直渡り波にあふのす会へる君かも

利根川の浅瀬がどこなのかも考えずに、やみくもに渡って波を受けてしまつたよ
うに、ばったりと出会ったあなたですこと。

上毛野乎度の多杼里が川路にも子らは逢はなも一人のみして

上野国の乎度の多杼里の川へ行く道で、あの娘が逢ってくれたらなあ。一人だけ
で。

或本 上毛野小野の多杼里が安波治にも夫なは逢はなも見る人なしに

上野国の小野の多杼里の安波治でも、あなたが逢ってくれたらなあ。誰にも見
られないで。

伊香保ろの八尺の井手に立つ虹の頭ろまでもさ寝をさ寝てば

伊香保の高い井堰の上に現れる虹がはっきりと見えるように、そのようにはっき
りと二人の仲が明らかになつてしまうほど一緒に寝ていられたらなあ。

*参考「子持山若鷄冠木の黄葉つまで寝もと吾は思ふ汝は何どか思ふ」（3494番）

上毛野佐野の舟橋取り放し親は離くれど吾は離るがへ

上野国の佐野の舟橋をばらばらにしてしまうように、親は二人を引き離しますけ
れど、私はあなたと離れたりしませんよ。

上毛野佐野田の苗のむら苗に事は定めつ今はいかにせも

上野国の佐野のたんぼの苗を使った占いで結婚を決めました。今さらどうにかで
きましようか。（できないでしょう。）

日の暮に碓氷の山を越ゆる日は夫なのが袖もさやに振らしつ

碓氷の山をあなたが越える日は、あなたも袖をはっきりとお振りになりました。

*参考「ひな曇り碓氷の坂を越えしだに妹が恋しく忘れぬかも」（4407番）

◎上野国の可能性のある歌から

左和多里の手児に行き逢ひ赤駒が足掻きを速み言問はず来ぬ

左和多里の乙女に出逢ったけれど、私が乗る赤毛の馬の歩みが速いので、言葉
を交わさないまま来てしまいました。

◎上野国の防人歌から

難波道を行きて来までと吾妹子が着けし紐が緒絶えにけるかも

右の一首は、助 丁上毛野牛甘のなり。

難波への道を行って帰って来るまで御無事でと、妻が着けてくれた紐が、長い旅
で擦り切れてしまったことだなあ。

わが妹子がしぬひにせよと着けし紐糸になるとも吾は解かじとよ

右の一首は、朝倉益人のなり。

私の妻が、「私を思い出すすがにしてください」と着けた紐は、たとえ擦り切
れて糸のようになってしまつても私は解くまいと思つているよ。